荒井金助と早山清太郎

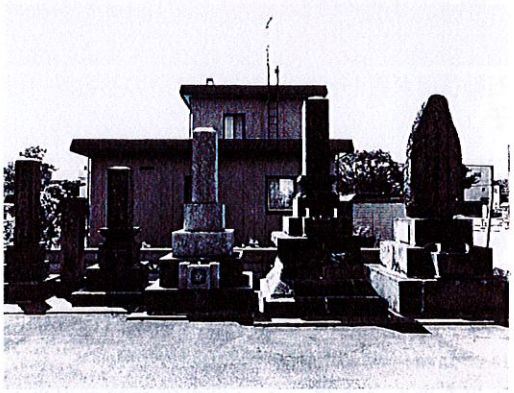
シノロ140年の歴史　後編

北区支部　池　本　吉　一

ロシアの脅威から北海道を守るべく、安政2（1855）年に、江戸幕府は、西蝦夷地を直轄することを決めた。この頃、荒井金助という幕臣が石狩役所に着任し、安政5（1858）年、農家8戸を篠路に入植させ、農業を前提とした未開地の組織的な開墾が始まった。荒井村の誕生である。一方、その1年前に、山岡精次郎という武士らが発寒に在住していたが、この配下の農民たちが、この荒井村に移り住んだ。一方、早山清太郎は、すでに蝦夷地に渡り、漁業、商業、林業などを転々としていた後に、現在の宮の森付近に入植していた。清太郎は荒井金助の求めに応じ篠路の地を調査し、荒井村開拓の地を現在の篠路駅付近に決定した。万延元（1860）年に清太郎自身篠路に入り、90歳でこの地で死亡するまでの間、開墾、耕作に開拓移民の指導者的役割を果たすこととなった。

一方、荒井金助は、その後、文久3（1863）年に人事異動で、函館へと転出し、58歳で、この世を去った。安政6（1859）年、早山清太郎は、琴似にいた中島彦左衛門らを荒井村の南西隣接地に入植してもらい中島村を開いた。その頃に、明治維新となり、明治2（1869）年、荒井村と中島村が1つになり、篠路村が誕生した。早山清太郎が2年後の明治4（1871）年に名主となり、以後、10数年にわたり、私財をなげうつなどして、篠路－札幌間、篠路－茨戸間など、札幌北郊に、二十余本の道路を築き上げた。さらには、元村（現・東区）の開村、札幌神社（現在の北海道神宮）の敷地の選定も彼の意見によるものだと言われている。

一方、明治政府は、明治2年に蝦夷地の守りを固め開拓を進めるために函館に「開拓使」という役所を設けた。しかし、広い北海道を治めながら開拓を進めていくには函館では南西に偏



龍雲寺境内に並び立つ、画面右端より、荒井金助と早山清太郎のお墓

りすぎていて不便ということで、札幌に開拓使を移した。その後、2代目開拓使判官の岩村通俊によって札幌の原始林の中に碁盤の目のような道路を作り、明治6年には、西洋式の建物の開拓使本庁舎が、現在の北海道庁の赤レンガ庁舎のところに完成させた。その頃より、札幌は、その辺りに狸小路をはじめとする商店や工場など、さらには、北海道大学の前身の札幌農学校も建ち始め、爆発的な発展を遂げていくのである。

北区には、明治維新によって失業し生活に困っていた士族も多数移ってきていた。明治4年、岩手県の盛岡から旧南部藩士10戸が伏籠川の中流に移住してきた。現在の「十軒」地区の始まりである。明治15年には、旧福岡藩士の黒田武士50戸175人が現在の石狩川沿いの篠路清掃工場がある付近に移住している。「福移」の名の由来である。この頃には、民間の開拓会社も出来て、福岡県の人が作った「報国社」という会社が、現在、百合が原公園付近、烈々布と呼ばれていた地区に出来たり、福移には「開墾社」も出来た。明治7年には、「屯田兵制度」

石狩役所が置かれていた明治初期の石狩浜の様子

明治4年ごろの篠路村

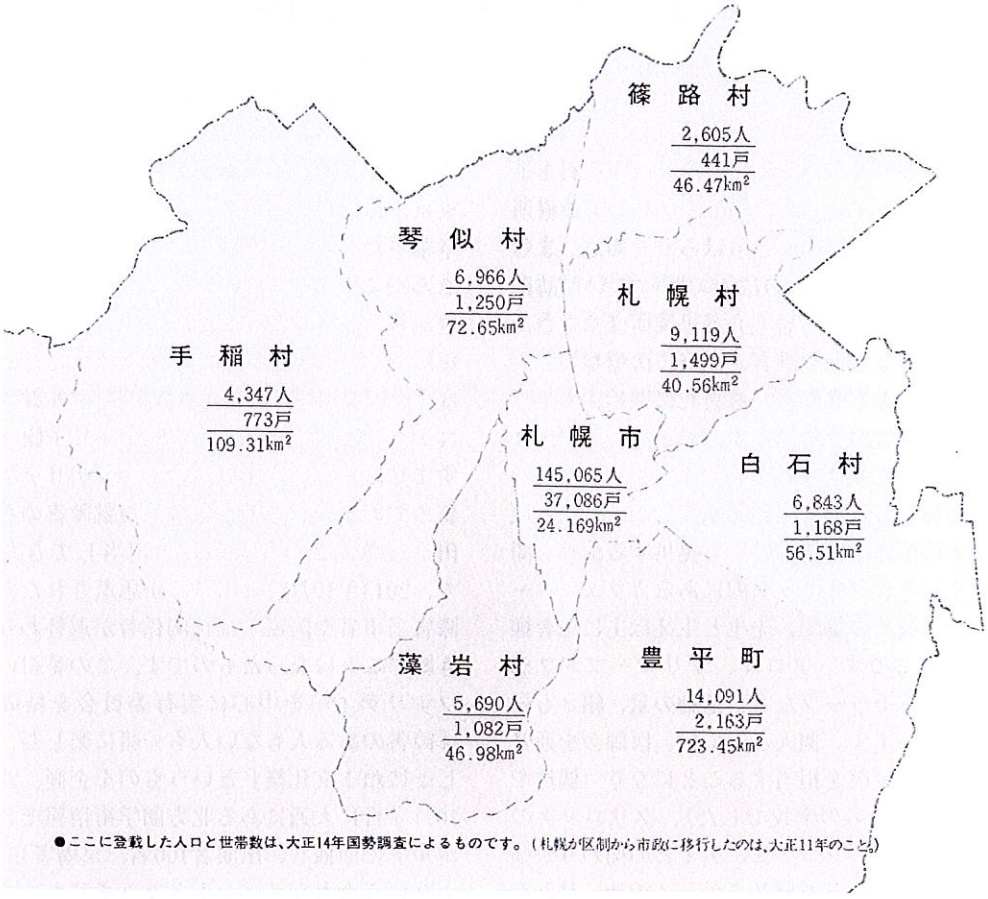
が作られ、北海道の警備と開拓を行うため、日本全国から家族ぐるみの移住を進めた。明治8年には、東北地方の士族198戸が琴似に、翌年には240戸が山鼻に、明治20、21年には九州士族を中心に220戸が新琴似に入植、明治22年には、篠路（現・屯田）に220戸が移住し、札幌本府を囲むように、4つの屯田兵村が出来上がった。明治の初期は、農作物は少なく、生活に必要な物資のほとんどを本州から船で運び、小樽や石狩に陸揚げした。石狩からは、物資を丸木船に乗せ、石狩川から伏籠川を遡って元村（現・東区）まで運び、そこから市の中心部までは馬や人が運ぶほか、新たに掘られた「大友堀」と呼ばれた運河を使って運ばれた。石狩街道が道らしくなったのは、明治19年の創成川の工事で、川を掘った土で盛り上げてからである。しかし、湿地帯だったため、雨のあとは、大変な悪路になり、何度も砂利を入れては流されることが繰り返された。これら豊平川、旧琴似川、伏籠川の影響もあり、年に2回、春の雪解けや秋の台風の頃、必ず北区全体は水害を繰り返すほか、今現在もそうであるように、多雪、厳冬により、交通は寸断され、さらには、熊、バッタの大群被害の連続で、開拓は困難を極めた。明治13年、日本で3番目の鉄道は、札幌－小樽間で開業され、昭和9（1934）年には、札沼線が開通、昭和2（1927）年には、西5丁目通りに市電が走り始めた。昭和30（1955）年、私の生まれた年ですが、琴似町、篠路村、札幌村が合併し、札幌市に、昭和36年には豊平町と、更に昭和42（1967）年には、手稲町と合併した。篠路区内でも、田畑、牧草地が急速に住宅地に変わり始め、おりしも、モータリゼーションの波が押し寄せ、一層道路が整備、舗装され、マイカーの時代に突入。昭和47（1972）年の札幌冬季オリンピックの前年、地下鉄南北線が開業すると、さらに札幌市は大都市に生まれ変わり始めた。140年前に、僅か8戸で入植した荒井、早山氏の夢を乗せた、あのイチョウの木の下のシノロフトの地は、今なお発展を続けているのである。(平成26年5月記)

参考文献

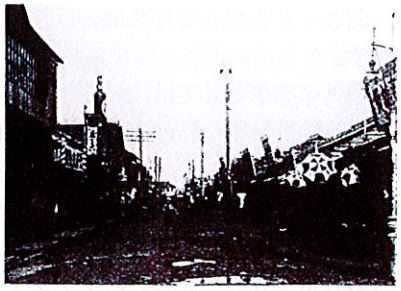
（1）さっぽろ文庫・別冊・札幌歴史写真集＜明治編＞＜大正編＞、札幌市教育委員会著、昭和57年2月発刊、大日本印刷
（2）風土と歴史1・北海道の風土と歴史、高倉新一郎・関秀志著、昭和57年12月発刊、山川出版
（3）エピソード・北区、札幌市北区役所市民部総務企画課著、平成19年3月発刊、須田製版
（4）北海道の宗教と信仰、佐々木馨著、平成21年8月発刊、山川出版

（篠路整形外科）

大正期の札幌市と衛星村落



●ここに登載した人口と世帯数は、大正14年国勢調査によるものです。（札幌が区制から市政に移行したのは、大正11年のこと）

◀南1条西2丁目から西を望んだ大正10年ころの札幌市街。

▼大正10年ころの狸小路西2丁目。